

平成 2 1 年 5 月の解説（府県天気予報）

【5月の天候状況】

上旬は、高気圧に覆われて全国的に晴れましたが、旬中頃に気圧の谷がゆっくりと本州付近を通過したため、東・西日本では曇りや雨のぐずついた天気となりました。中旬も晴れる日が多くなりましたが前半と後半に低気圧が日本海を進み、ほぼ全国的に雨となりました。沖縄と奄美地方では 18 日頃に梅雨入りしました。下旬の前半は低気圧が日本付近を通過したため、全国的に曇りや雨の日が多くなりました。旬末も、上空に寒気を伴った低気圧が日本の南岸をゆっくり東に進んだため全国的に天気はぐずつき、東日本の太平洋側では大雨となったところもありました。

月を通しての日照時間は南西諸島で平年よりかなり多くなり、北日本の日本海側と西日本の太平洋側でも多くなりました。降水量は西日本で平年よりかなり少なくなり、北日本と南西諸島でも少なくなりました。気温は北日本と東日本では平年よりかなり高くなり、西日本でも高くなりました。

【5月の検証結果】

17 時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報が 86% で例年^(注)より 2 ポイント高くなり、明後日予報は 80% で 1 ポイント低くなりました。地方毎の適中率では、明日予報は北海道、沖縄地方でそれぞれ例年より 9 ポイントと 7 ポイント高くなりましたが、中国地方では 6 ポイント低くなりました。明後日予報は北日本と沖縄地方で 5 から 11 ポイント例年より高くなりましたが、その他は例年より 5 ポイント前後低くなった地方が多くなりました。明日の最高気温の予報誤差は全国的に例年を下回り、特に東北から北陸地方では例年より 0.4 から 0.5 小さく、全国平均では例年より 0.3 小さい 1.8 でした。また最低気温の予報誤差は、ほぼ全国的に例年より 0.1 から 0.3 小さく、全国平均では例年より 0.1 小さい 1.4 でした。

^(注) 例年値は気象庁 H P（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【5月の天気予報から】

5 月 6 日 9 時の地上天気図（図 1）では、日本の南東海上に低気圧があって、北日本は帯状の高気圧に覆われています。このような気圧配置の時には、関東地方には下層(地表付近)に湿った北東の風が流れ込むため、雨は降りやすいもののその影響は明け方まででその後は曇りと予想し、前日の 5 日 17 時に発表した 6 日の東京地方の天気予報は、「曇り 明け方 まで 雨」としました。

しかし、雨は6日は夜遅くまで東京地方を含めて関東地方の南部から西部の広い範囲で降り、6日の日降水量は、檜原村小沢で51ミリ、八王子市八王子で39ミリ、千代田区大手町でも19.5ミリとなりました(図2)。これは、予想されていた下層の北東からの風に加えて、中層(上空約3000m前後)にも予想になかった湿った空気が広範囲に流れ込んだためです(図3)。

現在の予報技術では、雨をもたらす湿った空気の動きを的確に予想することが難しい場合もあり、今回の事例のように、中層や下層の風や湿りなど予想のわずかな違いが、曇りが雨となるような天気を大きくはずす原因となることがあります。

今後も、雨をもたらす湿った空気の動きを精度よく予想し、正確な天気予報を発表できるように引き続き取り組んでいきます。

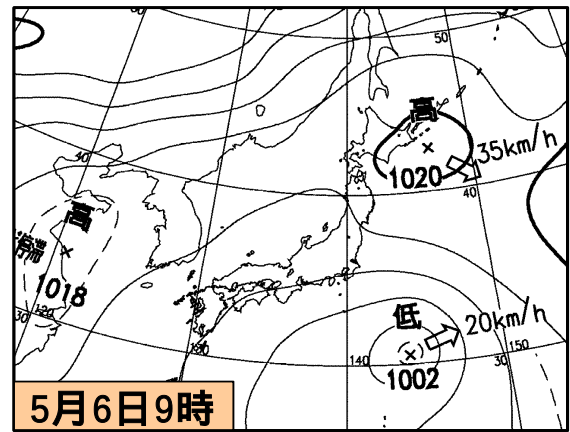


図1 5月6日9時の地上天気図

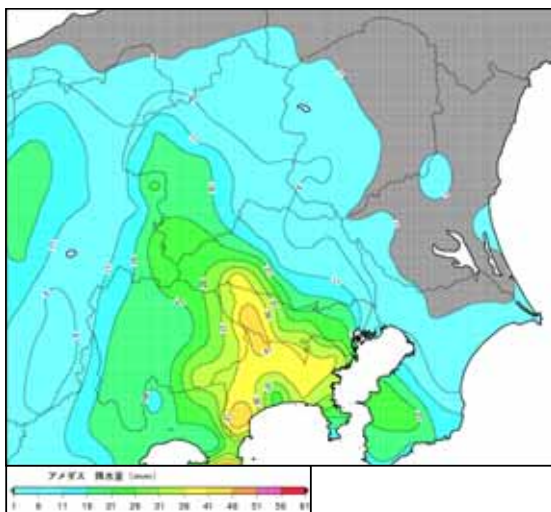


図2 5月6日12時から24時までのアメダス積算降水量分布図

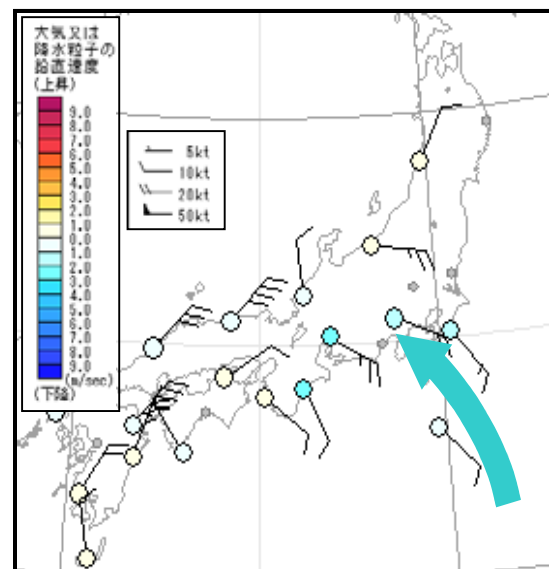


図3 5月6日9時の日本上空の風実況
水色矢印：雨をもたらす湿った空気の流れ

【7月の天気予報の利用にあたって】

7月は梅雨の後半にあたり大雨による災害が発生し易い時期です。とりわけ梅雨前線に台風の影響が重なると大雨が発生し易くなります。台風の向かう方向に梅雨前線が停滞していると、台風が遠く離れている頃から梅雨前線の活動が活発になって大雨が降ることがあります。また、その後の台風の接近によって雨が長時間にわたって降り続き、大きな災害が発生する場合があります。梅雨時期に台風が近づく予報が出ている場合には、台風が離れていても警報、注意報や天気予報などの気象情報に気を配りましょう。